

優秀賞

中学生部門

高知県高知市

私立土佐女子中学校1年

小松 恭子

## 肩叩き

母は、肩叩きが大好きです。

「恭ちゃん、肩叩きやって」

としつこく言ってくるので、私は嫌になります。けれども、仕方なくやらなければなりません。それは、疲れている母に、小学校五年生の時に私から肩叩き券をプレゼントしたからです。今考えてみると、どうして作ったのだろうかとうんざりしてしまいます。以前は、

「使ってや。せつかく作ったがやき」

と私から言っていました。でも、今はその逆で、使わないでほしい、捨てたいという気持ちになることがあります。けれど、捨ててもまた作らなくてはいけません。なぜなら、肩叩き券に「この券をなくしたらすぐ作ります」と書いてしまったからです。しかも、その券に「繰り返し何回でも使えます」と書いてしまったので、母が肩叩きをせがむと何回でもやらなくてはいけません。

私の肩叩きは、やる気のある時と、ない時の叩き方が全く違います。

「そこそこ。気持ち良い。ありがとう」

と言われると、もっとやろうかなとか、またやってあげたいという思いになります。けれども、何の反応もないとやる気が薄れます。だから、肩叩き中に母が眠ってしまうと、こっそりやめてしまうことが多いです。

また、勉強しようかと思っっている時によく肩叩き券を使われてしまいます。

「勉強やらんといかんき」

と断ろうとしても、

「勉強なんてやらんでえいき、肩叩いて」

と、しつこくせがまれます。でも、肩叩きが終わると勉強するように言われるので、そこは、自分だけ気持ち良い思いをしてずるいと思います。けれど、ありがとうと言われると、まあいいかと思ってしまうです。

「ありがとう」という言葉でまたやってあげようかと思ったり「またやって」と言われるとやる気をなくしたりと、言葉の力は難しく面白いものだと感じます。